
シラトリ青子

鈴木赤子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シラトリ青子

【Nコード】

N6040P

【作者名】

鈴木赤子

【あらすじ】

彼女は普通のニンゲンではない。

シラトリ青子

シラトリ青子は美しかった。

顔立ちというよりもその雰囲気だ。

色素が薄く、華奢な体つきがそれを際立たせていた。

瞳は明度や彩度を全く持たないかのように黒く、大きかった。

霞むような容姿とは逆に、眼は常にしっかりと開き、対象物を見据えていた。

眼を合わせると、吸い込まれそうになるとはまさに、彼女に対する言葉であった。

シラトリ青子は人間を嫌っていた。

本当に嫌いなのかはわからないにしても、少なくとも僕にはそう見えた。

容姿相応、性格は大人しく、声を聞くことは殆どない。

自己主張をしないため、彼女の生い立ちや家族構成は誰も知らなかったし、

知ろうとする人もまた、居なかった。

彼女自身、詮索されるのを何よりも嫌っているようだった。

彼女はいつも独りだった。

シラトリ青子は教室にいた。

窓際の後ろから2番目の、自分の席に座っていた。

僕の部活（天文部）の終わった後だった。

夕日が教室全体に差し込んで、机と椅子の影を描いていた。

彼女の長い黒髪も、夕日で橙色に光って見えた。

逆光で彼女の表情はよく見えなかったが、あの眼がこちらを見ているのはわかった。

時計の針は6時4分を差していた。

夏休み直前の7月某日。

僕はシラトリに呼び出された。

放課後の教室に居たのは二人だけだった。

怪我

「クロスくん。」

沈黙を破ったのはシラトリだった。

「だったかしら。クロスくん。」

「黒瀬だよ。」

窓際の後ろから2番目の席から彼女は言った。

彼女は僕の名前を十字架だと思っていた。

「あら、ごめんなさい。黒瀬君。」

人間の名前を覚えるのはすごく苦手なの。」

彼女は意外とはきはき喋る奴だった。

「別にいいけど。何？話つて。」

「うん。えっとね…。」

一瞬の沈黙。

再びこちらを見て言った。

「黒瀬君のお父さんつて、獣医さんよね？」

駅前黒瀬動物病院の。」

「え？まあ、そうだけど。」

彼女は僕の家のことを知っていた。

「人の名前は知らなかつたくせにどうして僕の家のことを知ってるんだ？」

「つけたのよ。あなたを。帰宅途中のね。」

彼女は恐ろしいことを言った。

「私って意外と鼻が利くのよ。」

楽しかったわ。探偵みたいで。」

「それを言うならストーリーカード。」

いつの間にそんなことしてたんだよ。」

「失礼ね。年頃の女の子に向かって。」

「ストーカーや盗撮なんてものに一番敏感な時期なのよ。」

「この変態。」

彼女は僕を罵った。

「なんでそうなるんだよ。つけられたのは僕だろ？」

「変態は変態よ。」

「下校途中にコンビニで何読んでたのよ。」

「そ、それは…。」

見られてたのか…。

「シラトリには関係ないだろ。」

僕の負けだった。

なんて理不尽な奴だ。

クスッ

シラトリが笑った。

「おもしろいのね。黒瀬くんって。」

「で？僕の家が動物病院だから何？」

この話を早く終わらせかけた。

彼女の口元はまだ緩んでいた。

教室は徐々に薄暗くなっていた。

シラトリは立ち上がって僕の方へつかつかと歩み寄り、僕の目の前

に立った。

放課後の教室、しかも女子と二人きりで向かい合うなんて初体験だ

った僕は、

一瞬たじろいだ。

「怪我をしているの。」

大きな黒い目でこちらをじっと見て彼女は言った。

「け、怪我って？飼犬が何か？」

「いいえ、私。」

彼女の口元はもう緩んではいなかった。

「誰だって？」

「私。痛むのよ。傷口が。」

「あのなあ。」

彼女は何を言っているんだろう？

「僕んちは動物病院であって、

怪我をした人間は受け付けていないんだ。」

「そんなの知ってるわ。」

彼女はさらりと言った。

時計の針は6時半を過ぎていた。

日はもう殆ど落ちてしまった。

夏休み直前の7月某日。

僕は信じられない事実を聞かされた。

「私、白鳥なの。」

シラトリ青子は人間ではなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040p/>

シラトリ青子

2010年12月20日02時11分発行